

## エペソ人への手紙4章22-24節 「キリストにある着脱」

### 1A エペソにある異邦人の歩み

1B 神の恐れなき姿 18

2B 不潔な行い 19

### 2A 神の民に与えられた挑戦

1B 出エジプト

1C 新しい歩み

2C カナンの神々

2B キリストに倣う学び 20-21

### 3A 新しく造られた者 22-24

1B 先取りした新しいいのち

2B 脱ぎ捨てる古い人 22

3B 身に着ける新しい人 23-24

1C 新しくされる心の霊 23

2C 真理に基づく義と聖 24

1D イエスにある真理

2D 神にかたどり造られた姿

## 本文

エペソ人への手紙4章を開いてください、聖書通読の学びは前回4章前半、17節まで来ました。そこで今日は、午後礼拝で18節から最後まで、4章の後半を見ていきます。今朝は、22-24節に注目します。「<sup>22</sup> その教えとは、あなたがたの以前の生活について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していく古い人を、あなたがたが脱ぎ捨てること、<sup>23</sup> また、あなたがたが霊と心において新しくされ続け、<sup>24</sup> 真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。」以前の古い生活を脱ぎ捨てて、キリストにある新しい生活を身に着けるといふ勧めです。

私たちキリスト者が、信じる前とその後の生活が変わるわけですが、それを、今まで以上に頑張る努力して、変わっていくようにするというものでないことを知ることは大切です。ちょうどそれは、一つの国からすぐに違う国に自分が住むようになって、その新しい国でのやり方に合わせていくようなものです。これはあたかも、一足飛びに日本からアメリカに移住して、その新しい生活に慣れていくようなものです。同じように、地上の国から、天上の国に移されました。これから、徐々に国籍が変わるのではありません、すでに変ったのです。けれども、自分自身は地上での生活しか知りませんから、天に召される者としての歩みは、全く新しいのです。ですから、これまでの古いやり方は捨て、新しいやり方を身に着けないといけません。少しずつ変えられたから、それで天に行けるのではなく、すでに天に属する者となったから、だから天の御国の民として新たな歩

みをするのです。

それは、あまりにも当たり前になっていたことが、実はそうではなく、今まで考えもしなかったことを、行うようにしていくという、まさに古い服を脱いで、新しい服を着るような、着脱するような生活になっていきます。新しい歩みについて、私たちが信仰を持ったばかりの時に教えてくれた、宣教師の人が、「お風呂の後でパンツをはく時、どちらの足から入れる？」と聞かれたので、「右足からです」と答えたら、「では、今日から左足から入れてみてください。」と言われました。これは、あくまでも例えですね。初めはぎこちないですね。また、すぐに忘れて、今までのやり方を繰り返してしまいます。けれども、少しずつ慣れて来て、新しいやり方に変えていくことができるのです。もうすでに、キリストにあって新しく造られたのですが、古いやり方が残っているのでそれを捨てて、キリストにある新しいやり方を身に着けるのです。

### 1A エペソにある異邦人の歩み

パウロは、4章17節から、「異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。」という、自分たちの住んでいるエペソの町で、多くの人々が歩んでいるように歩んではならないと勧めています。エペソの町の遺跡は、今は世界遺産になっています。その象徴的な建物の一つは、図書館です。ケルスス図書館と呼ばれ、ローマ帝国の第三の大きさを誇っていました。学問において、非常に優れたところであったところが伺えます。その図書館の遺跡は、多くの人々が感動をもって眺めるのですが、しかし、その真向かいに、遊郭(売春宿)の遺跡があるのです。男根をかたどった神の像が見つかったので、そこが遊郭だと分かりました。そして、港からケルスス図書館に向かう大きな通りには、道に、女の人の顔が刻まれているところがあり、「こちらにいますよ」という宣伝広告の跡も残っています。

これは、エペソの町を象徴しているものです。非常に優れた知性を誇っているのですが、目の前で、淫らな行いをする場所があったということです。確かに、大いに繁栄し、富に満ちた町ですが、性的に逸脱した行いが、偶像礼拝と共に行われていました。ローマ社会では、生まれてきた赤ん坊を捨てるのは当たり前のことであり、望まない赤ん坊のゴミ捨て場さえありました。エペソも例外ではありません。そして、赤ん坊を拾っていったのは、キリスト者です。

### 1B 神の恐れなき姿 18

これが異邦人のむなしい生活とパウロが、17節で言っていることです。彼らの特徴の一つは、18節にあります。神への恐れなき生活です。「4:18 彼らは知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、頑なな心のゆえに、神のいのちから遠く離れています。」すべてのことは、天地を造られた永遠の神から来ていることは、だれの目にも明らかです。自分の今、息していることさえ、自分自身で行うことはできません。しかし、そうしたことにはほんの少しの思いも寄せない、それが、知性において暗くなっている、無知である、ということです。ただ知識として知らないのではなく、見ようもしない、知ろうもしないという頑なな心のことを話しています。箴言には、「主を恐れること

は知識の初め。」とあります(1:7)。

## 2B 不潔な行い 19

そして、こうした無知の次に出てくることですが、19 節です、「4:19 無感覚になった彼らは、好色に身を任せて、あらゆる不潔な行いを貪るようになっていきます。」本来なら、心に痛みが生じるような、性的な逸脱を、いとも簡単に平気で行うことができるようになってしまいます。アジア全体で有名であり、参拝者が絶えなかったアルテミス神殿ですが、そのような神殿では、祭司になろうとしている人が、麻薬のようなものを使って精神的に自分をかく乱させ、衆目の前で自ら去勢します。それが宗教儀式なのです。そして去勢した者たちが、祭司となって仕えます。このように、自然の感覚で言えば、あまりにも気が狂って、おぞましいことを、平気で行うようになっていました。

## 2A 神の民に与えられた挑戦

このような、空しい生き方から救い出され、贖い出されたのが、私たちキリスト者です。かつて、神の民であるイスラエルも、このことを経験しました。

## 1B 出エジプト

主が、エジプトから贖い出して、荒野の旅において、シナイ山のふもとで教えられました。「レビ 18:3 あなたがたは、自分たちが住んでいたエジプトの地の風習をまねてはならない。また、わたしがあなたがたを導き入れようとしているカナン地の風習をまねてはならない。彼らの掟に従って歩んではならない。」イスラエル人たちは、生まれてからずっと、エジプトの風習の中で育って来ました。そこも、同じように、忌まわしいことが行われていました。当時の慣わしについてちょっと調べれば、国をあげて、ファラオも含めて、口にするのも恥ずかしい淫らな行いが当たり前に行われていたことがわかります。しかも、エジプトの神々の名によってそれらのことが行われていました。イスラエルが、金の子牛を造って、性的に乱れていたのは、その背景を知るとよくわかります。今は荒野にいますが、これから入るカナン人の地も、その風習もひどいものでした。モレクに献げるときは、生まれてきたばかりの子をささげます。

## 1C 新しい歩み

イスラエルの民にとっての挑戦は二つあります。一つは、自分たちの新しい歩みについて、前例がないことです。「こうやって生きればよいのだよ。」という先例が、見当たらないのです。全く新しい、生き方を、いわば自分たちで果敢に取り組まないといけないということです。

## 2C カナンの神々

そして、もう一つの挑戦は、イスラエルの民にとって、「郷に入っては郷に従え」のごとく、カナンの地の風習を真似する誘惑は極めて強いということです。多神教を信じている人々にとって、神々というのは、その地域の神々です。つまり、エジプトではエジプトの神々があり、カナンにはカナンの神々があり、それぞれの地方にあがめられている神々がいて、そこに行けば、その神々に仕え

ることが礼にかなっていると考えていました。

キリスト者でさえ、時に、この考え方が出てきてしまいます。教会に来れば、キリストをあがめるべきだ。しかし、仕事においては、その職場の人々が敬っているものがあるのだから、それに従うべきだということです。どこにいても、いつでも、キリストに教えられたとおりに生きるということになると、角が立つから控えるのです。教会にはキリストの神がいるが、職場には職場の神さまがいるのだというように考えるのです。相手を敬うがばかりに、相手の神にも従ってしまいます。一番大きいのは、家族の神です。キリストの教えは理解できるけれども、自分の家では、そこのお寺のの檀家になっているから、という理由ですね。福音書での、イエス様の教えはとても分かりやすいものです。家族や自分のいのちさえ憎まなければ、わたしを愛して、わたしに従うことはできない、とイエス様が言われたのは、主は二人以上いるのではない、わたし一人だけなのだということだからです。自分が何を信じるか？という知的なこと以上に、自分がどこに忠誠を誓うか、ということがもっと大事になります。

## 2B キリストに倣う学び 20-21

今、イスラエル人たちは荒野にいるのですが、これから約束の地、カナンの地に入ってから、どのようにして、その風習から守られるのでしょうか？これまで、だれも手本がいません。そして、その地の人々と同じように生きるのではなく、異なった生き方をするのは、どうすればよいのでしょうか？これは、私たちキリスト者も同じですね。このように生きればよいという先例が、日本社会の中にはありません。そして、日本社会や文化、そのしきたりを敬わなければいけないという圧力は、強く感じます。

そこで、パウロは「キリストに倣いなさい」と勧めます。20-21 節です、「しかしあなたがたは、キリストをそのように学んだのではありません。21 ただし、本当にあなたがたがキリストについて聞き、キリストにあって教えられているとすれば、です。真理はイエスにあるのですから。」イエス様と、教えられたところに、徹底的に立つということですね。私たちは目に見える形で、どのようにキリスト者として生きればよいのかは、前例がないのです。御霊によって、みことばによって、この方に倣うようにしていくのです。ある意味で、私たちは開拓者です。キリストに似せて生きていくことは、こういうことなんだよということを、周囲に知らせる初めての人々です。イスラエルの民にとっては、それは神の与えられた律法であり、その律法には、イスラエルの国民生活の事細かい規定がありました。それは、周りの国々に彼らが見倣えるものは何一つなく、「主を愛しなさい」という戒めをどのように具体的に行っていけばよいのかを示すものでした。

もちろん、私たちには、先輩のキリスト者がいて、その模範があります。パウロは、先例がないことをよく知っていて、手紙の中で、「私たちがキリストに従うように、私たちに倣いなさい。」と言って、手本を示したのです。( I コリント 11:1 など)それでも、ちょうど新しいビジョンをもって、全く新しい土地に自分たちの入植地を開拓するかのように、私たちは、イエス様に倣って、その生き方に

従うことを、御霊とみことばによって知っていき、それでその中に生きることによって、初めて周囲の文化や慣わしに流されることなく、神の民として生活できるのです。

### **3A 新しく造られた者 22-24**

#### **1B 先取りした新しいいのち**

キリストにあって新しい生き方をしていくにあたって、私たちが知らなければいけないのは、「すでに新しい人になっている」ということです。ここでは、新しい人を身に着けると言っていますが、これはあくまでも、新しい生き方を身に着けるということであり、すでに新しくされた自分がいて、その新しい人に合わせた歩みをするということでもあります。「Ⅱコリ 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」私たちの古い人は、キリストと共に十字架に付けられました。そして、キリストがよみがえられた時に、私たちもキリストにあって新しいいのちを得たのです。終わりの日に、永遠のいのちに至る復活が約束されていますが、そのいのちを霊的に先取りしていただいているのです。

先ほど、キリスト者になることは、一つの国から他の国に一足飛びに移るようなものだとお話ししました。日本からアメリカに行く時に、太平洋を、ヨットで横断するような、徐々に移動するものではないのです。飛行機で 10 時間かけて、行くようなものでもありません。間髪入れずに、ドラえものの「どこでもドア」のように、瞬時に移されました。。イエス様は、終わりの日に起こる復活を、今すぐ、その霊的ないのちを受け取ることができることを、マルタに語られました。ベタニアにいた、マルタとマリアの兄弟であるラザロが死んでしまった時のことです。イエス様は、「あなたの兄弟はよみがえります。」と言われました。マルタは、「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」と答えました。しかし、イエス様は彼女に言われます。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。」(ヨハネ 11:23-26)

マルタの言っていることは、ユダヤ人が信じていたことです。終わりの日に、神が死んだ者たちをよみがえらせるということです。彼女にとって、それは終わりの日、ずっと先のことだったのです。けれども、イエス様は、「わたしが、そのよみがえりです、いのちです。」と言われました。ご自身を信じる者には、そのよみがえりのいのちが、既に与えられているのです。しばしば、キリスト者は、「既に、未だ(Already; Not Yet)」の中に生かされていると言われます。すでに、永遠のいのち、復活のいのちは与えられているけれども、肉体の復活はまだ与えられていないということです。

そういったことで、私たちが勘違いしてはいけないのは、今、自分の内に多くの古い習慣があっても、それで自分はまだ古い人なのだと思うことです。そうではありません。すでに、新しい国、キリストの御国に入れられているのです。それら古い習慣は、いわば残骸です。古い人が残して行った、数々の習慣です。それらを捨てて、断捨離をして、それで、新しいところにいるのですから、それに合わせて新しい習慣を身に着けるのです。

## 2B 脱ぎ捨てる古い人 22

<sup>22</sup> その教えとは、あなたがたの以前の生活について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していく古い人を、あなたがたが脱ぎ捨てること、

古い人とは、「人を欺く情欲によって腐敗して」いるということです。まず、「情欲」ないついでですが、これは性的な情欲に限りません。人には、いろいろな欲求がありますが、それを神の定められたところで用いる時に祝福されます。食べること、飲むこと、そして夫婦の関係を持つこと、それぞれ食欲や性欲ですね。主の御名によって食べて飲む。そして主が結び合わせた二人の間で、性を楽しむ。その中に初めて、真の悦びがあります。ところが、その、神の定められた境界線を越えてこれらの欲望を満たそうとする時、それは貪りであり、情欲になります。

そして、この情欲によって自分自身を、また人を欺きます。世は、どれほど欺きで満ちているでしょうか？これこれをすれば、自分は満たされると約束します。けれども、どれほどの痛みと傷と、苦々しさが残るか知れません。男女の関係は結婚まで待ちますなんて言えば、一笑に伏されるでしょう。けれども、結婚まで待った夫婦こそが、その性の営みを楽しむことができていることを知りません。心と体はつながっていますから、一度肉体関係を持てば、心と体のバランスを崩すのです。また性病の問題もありますね。今、梅毒が若者の間で、このコロナ禍で急増しています。そうした闇の部分は見せることなく、いろいろな情欲を、いかにもいいことだとして、世は、覆い隠しているのです。他の貪りもみなそうですね、お金や名誉とか。

そして、「腐敗」し、滅んでいきます。食べ物が腐って、捨てられるように、私たちが霊的に、道徳的に、時に肉体においても腐敗し、滅んでしまうのです。

## 3B 身に着ける新しい人 23-24

<sup>23</sup> また、あなたがたが霊と心において新しくされ続け、<sup>24</sup> 真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。

私たちは、お風呂の時などを除き、脱ぐことは、裸になるために脱ぐのではなく、新しく着るために脱ぎます。同じように、古い人を脱ぎ捨てるのは、脱ぎ捨てるのが目的ではなく、新しい人を着るためのものです。これこれをしてはならない、という、何かを禁じる命令に、私たちは目が留まりがちですが、キリスト者の歩みは、「これこれのことを行いなさい。」という、積極的に関わることが命じられています。午後に学びますが、盗みをやめるだけでなく、貧しい人に施しをすることができるよう、汗水流して働きなさいと勧めています。

新しい歩みを始めることによって、古い歩みが忘れられるようになります。私が、スクール・オブ・ミニストリーで、聖書的カウンセリングの授業を受けている時でした。先生が、白い象を頭に思

い浮かべてください、と言いました。それから、「その白い象を消してください。」と言いました。頭から消せる人と、消せない人がいましたが、消せた人たちは、別の色の象を思い浮かべたのだそうです。紫の象を思い浮かべれば、白い象は瞬く間に消え去ります。光と闇の関係もそうですね、闇を打ち消そうとしても消せませんが、光をつければ、闇は一瞬にして逃げ去ります。同じように、新しい人を身に着けようと思えば、古い人を脱ぎ捨てることができるのです。

### 1C 新しくされる心の霊 23

「あなたがたが**霊と心において新しくされ続け**」るとするのは、私たちが、神の御霊によって思いが変えられていることです。(日本語訳の「心」は、正確には「思い」です)思いは、私たちの霊の状態を反映します。思いにおいて、戦い、葛藤が繰り広げられます。肉に属することを求めるのか、御霊に属することを求めるのか、その戦いの現場が思いです。キリスト者は、神の御霊によって、霊が新しくされました。それで、思いも神の御霊に属することを求めるようになります。

### 2C 真理に基づく義と聖 24

#### 1D イエスにある真理

「**真理に基づく義と聖**」とあります。真理とは、イエスご自身にあります。イエスご自身の内に、義と聖があります。義は、まっすぐなことを意味します。他者との関係が、曲がっていない、まっすぐであるということです。あるべき位置それぞれが置かれています。例えば、自分が借りたお金を返したら、それは正しいことですね。あるべきところに、置かれています。聖とは、神のものになっていることです。他のものが混じっておらず、神だけのものに別たれていることです。イエス様は、義も聖も持っておられました。人々に正しくあられました。憐れまれました。そして、父なる神だけのものになっておられました。同じように、私たちがイエス様にあって、人との関係が正しく、また神だけのもの、聖なる者として歩むのです。

#### 2D 神にかたどりに造られた姿

そして最後に、「**神にかたどりに造られた新しい人**」とあります。人は初めに、神のかたちに造られました。しかし、その最初の人アダムが罪を犯したので、神のかたちが損なわれてしまいました。しかし、神のかたちの完全な現われであるキリストが来られて、キリストにあって私たちは、神のかたちに回復します。これが、私たちの存在意義です。自分のことを考える時、自分って誰なんだろう？って思う時、「神のかたちに造られた人」なのだ、と思い出してください。

私たちは、どうしても、自分の今までの生き方によって自分の尊厳を決めてしまいます。自分がゴミみたいな生き方をしてきて、それで自分はゴミみたいな存在だと思ってしまうかもしれません。けれども、違います。神に似せて造られた人の子孫なのです。あなたは、キリストにあって神にかたどりに造られた人なのです。そのような新しい人になったのです。ですから、その新しい人として生きることができます。